

加賀における伝・仙叟好みの茶室について

— 如是庵・瀧雪亭 —

池田俊彦*・吉江勝郎*

Two Tea-Ceremony Rooms With Senso-Gonomi Manner, in Kaga

— Nyoze-An, Saisetsu-Tei —

Toshihiko IKEDA, Katsuro YOSHIE

Contents :

1. Preface.
2. About Senso, the 1st. Soshō of Ura-Senke, in Kaga.
3. Survey : Nyoze-an, a tea-ceremony room, in Komatsu-city.
4. Survey : Saisetsu-tei, a tea-ceremony room, in Kanazawa-city.
5. The relation between two tea-ceremony rooms with Senso.

1. はじめに

仙叟宗室（元和8・1622～元禄10・1697）は裏千家の初代宗匠であるとともに、加賀前田藩の茶頭であったことでも知られている。^{〔1〕} 小稿は、加賀におけるその活動のなかで、仙叟が好み建てたと伝えられる茶室の実地調査結果を報告し、その特徴と所伝について考察を加えるものである。加賀の茶の湯に関する従来の研究には、通史的・網羅的なものとして『加賀の茶道』と『加賀の茶室』があり^{〔2〕}、いずれも長年渉猟された史料を総覧できる好著であるが、これらは茶道史家としての立場から編まれたものである。小稿はその成果を踏まえつつも、建築史学の立場から捉え直すことを前提としている。ここで報告する2棟の茶室は、前掲書において仙叟好みとされているもので、小松市那谷寺の如是庵と、金沢市玉泉園内の瀧雪亭という、小間の草庵茶室である。

2. 加賀における仙叟

仙叟が茶頭として加賀前田藩にいつから仕官したか、実のところ正確には分らない。最も早い所伝では寛永3（1626）年^{〔3〕}、その他に寛永17（1640）年^{〔4〕}、寛永19（1642）年^{〔5〕}、承応元（1652）年頃^{〔6〕}などの諸説がある。ただし寛永3年説は、仙叟4才のため認められてはいない。いずれにしても3代藩主前田利常（文禄2・1593～万治1・1658）が、寛永16年に小松城に隠居して以後の、数寄三昧に入った時期と重なっている。

仙叟は利常が没した翌年、すでに5代藩主となっていた綱紀の命によって金沢へ移住することになったが、利常と同年に父宗旦（天正6・1578～万治1・1658）も亡くなっており、そのため

*建設工学科 建築学専攻

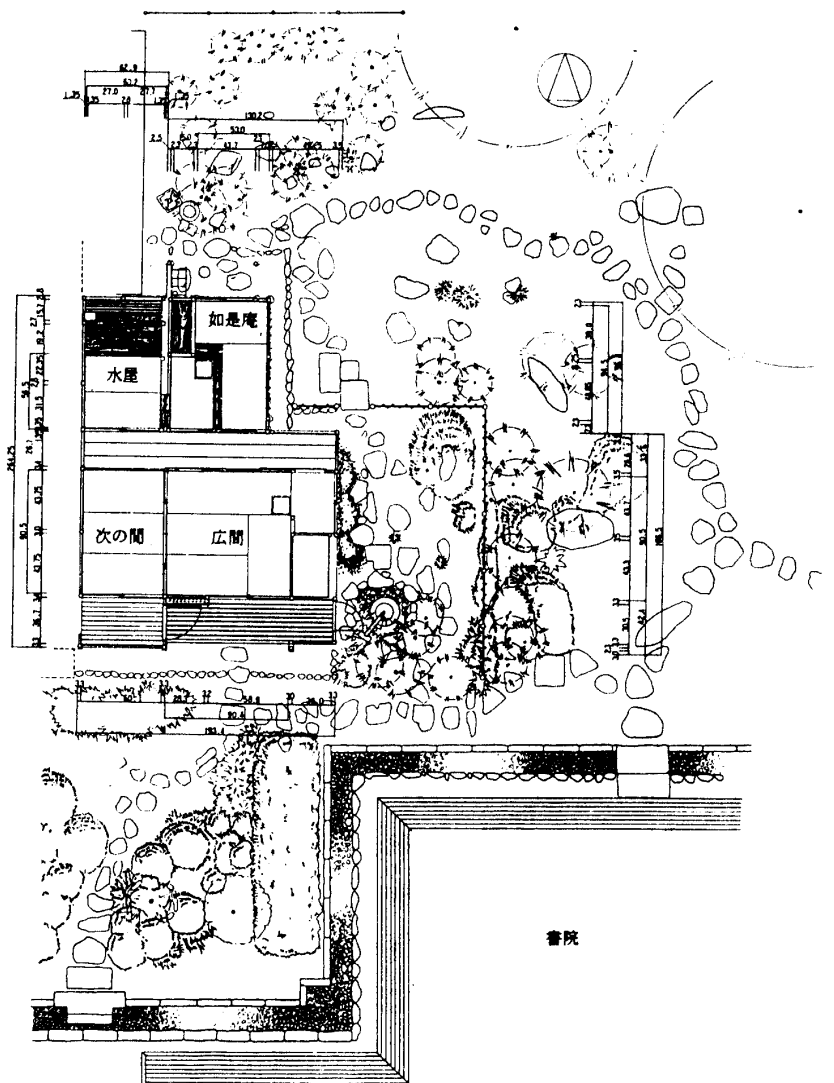
もあってか、金沢在住期の仙叟は京都との往復をしばしば重ねていたらしい。〔7〕 仙叟の金沢屋敷は、味噌蔵町稻荷橋近くにあったと伝えられ〔8〕、ここを金沢の本拠として、致仕するまでのあいだ茶の湯の活動に励んでいた。〔9〕

仙叟が茶室に対して如何なる好みをもち得ていたか必ずしも明確ではないが、加賀藩と関わっていた約50年間の茶道界は、小堀遠州の茶風が広く受け入れられた時期であり、父宗旦が深化させていた利休流の佗び茶は、普及度という点で劣勢の色が濃厚であった。仙叟にしてみれば、加賀の地で千家流の茶を躍進させようという意気込みが強かったに違いなく、この点を予め考慮しておく必要があると考えられる。〔10〕 また、もう一点無視できないのは仙叟の人間関係である。仙叟の義理の母は東福門院の女官であったと伝えられ、また利常の室天徳院が東福門院の姉に当たる。東福門院は、寛永期に大きく開花した宮廷文化のなかで、中心的な役割を果たした後水尾天皇の中宮であり、利常が公家文化に大きく傾いていったのと同様に、仙叟自身もそれを全く意識していなかったとは言えない。仙叟が生きたころに建てられたとされる裏千家の寒雲亭や無色軒、外腰掛などの造形に、宗旦の極佗びとは異なる新たな傾向が模索されているのも、こうした背景が関わっていると考えられる。

なお、金沢市山ノ上町の月心寺には仙叟の墓が現存している。ここには裏千家11世玄々斎の好みになる茶室が伝えられているが、仙叟好みの茶室遺構や史料などは伝えられず、いかなる経緯で墓が建てられたか詳らかでない。〔11〕

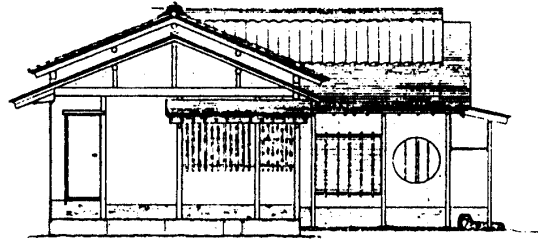
3. 如是庵

如是庵は那谷寺〔12〕の書院の庭園内に建っている。書院のほか幾つかの建物は、前田利常が後水尾天皇の勅命を受けて寛永21（1644）年までに再興した建物で、〔13〕 その作庭は小堀遠州の流れを汲む分部卜斎とされている。如是



如是庵平面図

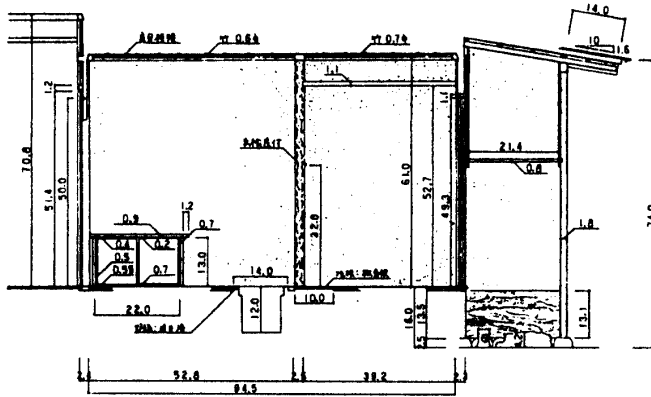
如是庵



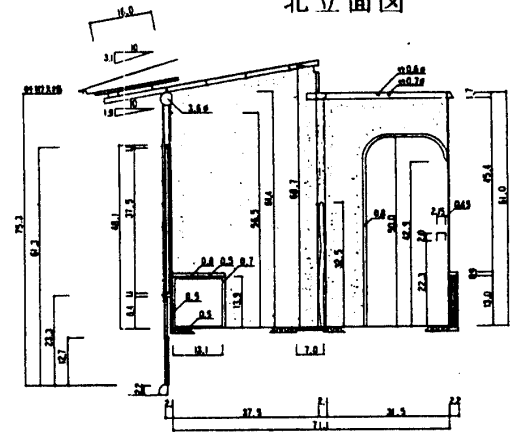
東立面図



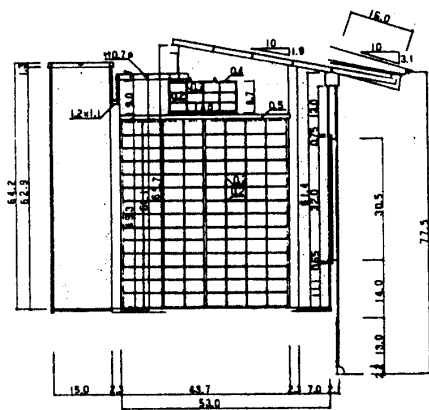
北立面図



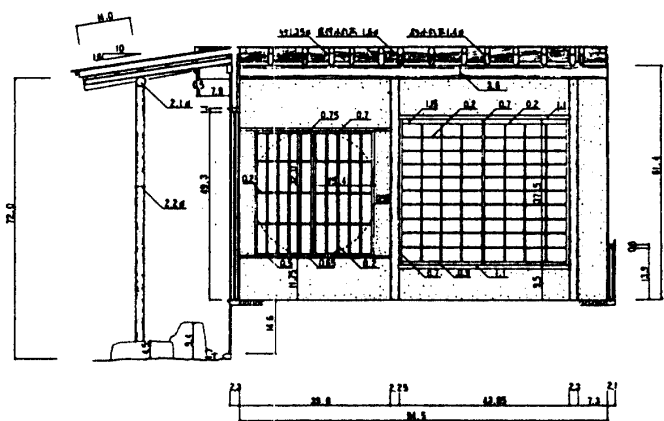
西面展開図



南面展開図



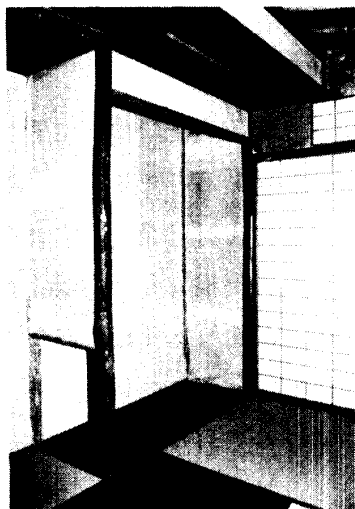
北面展開図



東面展開図



北側外観



床回り



点前座回り

庵が仙叟の指導によるものであったとすると、書院が建立されたのとほぼ同じ時期に建てられたことになる。しかし調査した結果では、これを証する史料が全く伝えられておらず、今のところ現存する遺構以外に手掛かりはない。また、書院（庫裏を併設）が昭和34年から翌年にかけて解体修理されたのに伴い、当時書院と接続していた如是庵も一時的に取り払われており、その後も修理や改築がなされているため、こうした現状を踏まえて、調査結果を以下に述べてみたい。

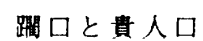
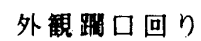
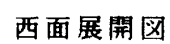
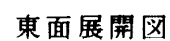
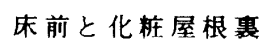
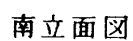
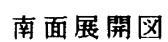
現在の如是庵は水屋を併設しているほか、四畳半台目の広間茶室と三畳の次の間を加えた全体構成になっており、これらの周囲に広がる露地は、書院前の庭の一画を共有する配置になっている。広間と次の間は近年改築されたもので、古材は全く残っていないし、水屋も書院修理後に新しく造り込まれたものである。これは平面図の実測寸法にも表れていて、如是庵の間取りが京間と考えられるのに対し、それ以外の部分には田舎間が用いられている。京間畳の大きさは茶の湯の点前にとって重要な意味をもっているから、この意味では順当な結果と言える。

如是庵の平面は、客畳として丸畳と台目畳が1枚ずつ敷かれ、これに台目畳の点前座と踏込床が加わっている。ただ点前畳と客畳の間には、矩折りに板畳が入れてあり、両者を視覚的に区別する扱いとなっている。板畳によるこうした扱いは、千家流の茶室にしばしば見られるもので、武者小路千家官休庵の半板や、表千家7代如心斎の指導と伝えられる大徳寺玉林院養庵の中板などが好例であろう。如是庵では客付の板を半板と同じ7寸幅にし、点前座に向切の炉を切っている。平面全体で見れば、変則的な間取りと言えよう。

踏込床も異例である。ふつう地板は一枚板を敷き込むだけであるが、ここでは床框の見立てらしき無目敷居が2辺に入れている。板畳（松）に比べ、床の地板（樺）は少し新しい材のようにも見え、当初の手法か否か判断するのは難しい。床柱は赤松皮付、脇の壁留は竹で、千家流の取り合わせとなっており、この竹の下吹は、床と並ぶ点前座の風炉先窓と考えることができる。

壁面構成は、貴人口や大きな窓が設けられているので開放的である。また西面には洞庫、南面には火灯口と小さな片引きの口が開いており、変化に富んでいるとも言えるが、これらがすべて当初から設けられていたか明らかではない。また、如是庵の柱はすべて古材のため、壁面の位置が大きく変えられたことは無いと考えられるが、東壁面の窓の敷鴨居はいずれも取り替えられた形跡があり、窓の意匠は異なっていたかも知れない。

天井の構成は、床前の平天井を除き、客座の上はすべて化粧屋根裏である。点前座の上は通常落天井とするが、ここでは床前の天井と同じ高さで竿縁天井を張っている。しかし屋根と天井は近年全面的に改変補強されており、天井に古材は全く見られない。また北立面が示すように、旧材の母屋が一箇所だけ妻壁に残っていて、屋根勾配が旧状より急になっていることが分かる。この改変によって、結果的には大屋根の下に造り込まれた茶室のようになっているが、もとは恐らく、内部の化粧屋根裏がそのまま外の屋根となっていたものと考えられる。また、床前の平天井は、北面の欄間ときわどい取り合いになっており、改変時に平天井が付け加えられたか、欄間が後補のものである可能性がある。



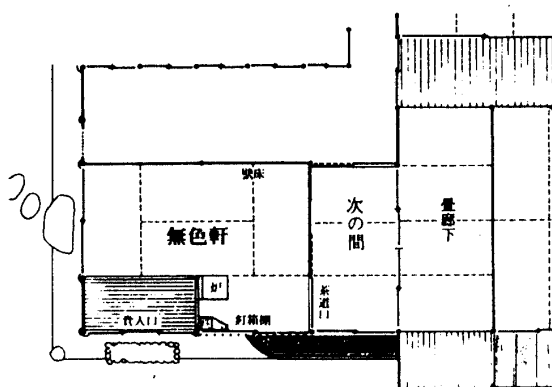
だとすれば、天井構成も如是庵のそれによく似ているということになろう。

5. 2席の特徴と仙叟好み

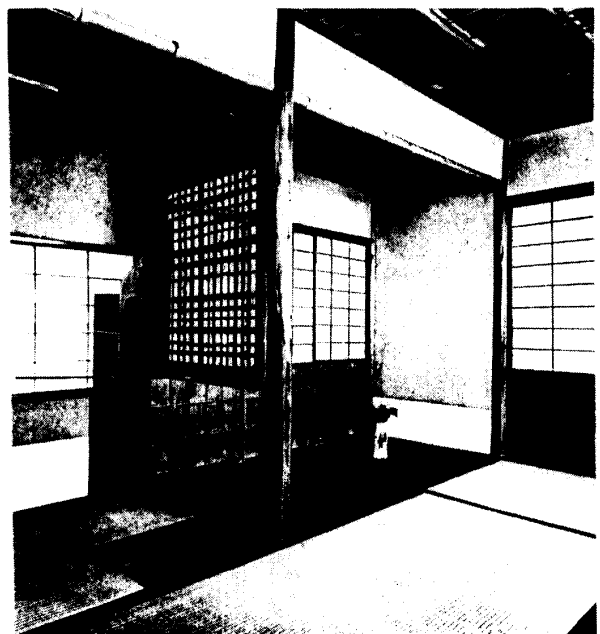
調査した2席の茶室は、雪国の宿命とも言うべき屋根回り全体の修復を受けているため、どちらも当初の構成を確定することはできないが、基本的な構成を覆すような大きな変更は恐らくなかったと考えられ、これを前提にして両者に見られる共通点をいくつか挙げてみたい。

まず第一に言えるのは平面が酷似していることである。外形の短辺は4寸程度違うものの、ほぼ同じ大きさの矩形の内側に床を組み入れ、台目畳向切の点前座を床と並べて置き、残りを丸畳と台目畳1枚ずつで埋めて板畳で調節している。第二に、貴人口を含めた開放的な開口部を設けていることである。瀧雪亭では躰口を異例の引違いにまでして外部との関係を保とうともしている。第三には床構えが似ていることである。踏込床にして赤松皮付の床柱を建て、竹の壁留で脇壁を吹き抜いている。以上の3点に加え、おそらく天井の構成も以前は同じだったのではないかと考えられる。

以上のような共通点を総合的に考えてみると、無色軒の手法と重なってくるように思われる。調査例とは広さこそ違うものの、板の間と点前座を並べて矩形の部屋の中にとり、腰障子を建てて開放的な構成にしている点はまさに如是庵や瀧雪亭に通じるし、板の間と畳との境には無目敷居も入っているから、あるいは如是庵の床地板のあり方が元来の手法であったのかも知れない。無色軒は裏千家7世竺叟（宝永6・1709～享保18・1733）が好み建てたと伝えられているが、彼は25才で他界しており、また、寄付としての無色軒と密接な関係で使われる腰掛が仙叟好みであること、そして点前座の釘箱棚も仙叟好みであることなどから、無色軒を仙叟好みとする説もある。^{〔21〕} 仙叟はまた、利休流四畳半又隠の躰口上の下地窓を開放的な連子窓に変えることも行っており、宗旦までの求道的な茶室に対し、新たな千家流茶室の模索を確実に始めていた時期と言えよう。兄である武者小路千家一翁も官休庵の半板を工夫していたし、宗旦も晩年になって一畳台目に向板を入れて現在の今日庵の原形を造っていたから、如是庵と瀧雪亭の板畳の工夫も、それとの関係で考えられるかも知れない。調査した遺構そのものは、調査を終えてもなお、仙叟が好み建てたという確証を得られてはいないが、仙叟の好みが表れているとする点では差し支えないと考えられる。



裏千家平面図



無色軒内部

注.

- [1] 茶頭は、近世においては藩内の茶の湯に関する一切の指南役のことで、禄を与えられる藩の公職であった。茶堂とも記される。また仙叟は、三千家に別れてからの裏千家初代であるが、裏千家では利休を1世とし、仙叟は利休から数えて4世としている。
- [2] いずれも牧孝治著。『加賀の茶道』昭和58年4月、北国出版社。『加賀の茶室』昭和58年10月、増補版、北国出版社。
後者に先だつ研究としては『金沢の茶室』岡田孝男著、新住宅、第79号～第82号、昭和33年4月～7月、新住宅社がある。
- [3] 脇田家傳書の「宗室之来本藩在寛永三年時」による。『松雲公遺稿古文類纂卷百八十八雑部七』、森田平次輯纂。金沢市立図書館蔵。
- [4] 注[2] 前掲書『加賀の茶道』による。
- [5] 『元伯宗旦文書』に、仙叟が前田利常に仕えて小松城三の丸に屋敷を賜る旨が記され、『寛永十九年小松侍帳』との関係から比定できる。
- [6] 『近世茶道史』。谷端昭夫著 1988年12月 淡交社。
- [7] 注[6] 前掲書による。
- [8] 注[2] 前掲書『加賀の茶道』による。現在の大手町。
- [9] 茶事の内容的な内容を知ることができるのは『加州金沢住居口切客之覚』である。これは金沢における仙叟の自会記で、寛文8(1668)年10月から翌9年正月までを書き留めている。また仙叟の致仕の時期については、注[6] 前掲書によれば元禄3(1690)年より後とされている。
- [10] 仙叟が関わったか否か明らかではないが、利常は承応元(1652)年、小松城葭島に妙喜庵二疊の写しを建てている。
- [11] 実地調査による。
- [12] 那谷寺は真言宗高野山派の別格本山で、寺伝によれば養老元(717)年秦澄大師によって草創されたとする。また『重要文化財那谷寺書院庫裏保存修理工事報告書』(昭和35年7月那谷寺)によれば、天正年間(1573～1576)の一向一揆の際、七堂伽藍は焼失したとされる。
- [13] 注[12] 前掲書の保存修理工事報告書による。書院の鞘の間に「十二年」の墨書が発見され、書院の建立時期を寛永12年としている。
- [14] 金沢市小將町所在。
- [15] 注[3] 前掲書。
- [16] 脇田直賢の子。直賢は万治3(1660)、直能は延宝3(1675)に没している。
- [17] 注[9] の『加州金沢住居口切客之覚』のこと。
- [18] 朱子学者。元和7(1621)年に生まれ、元禄11(1698)年没。前田家に仕え、天和2(1682)幕府の儒者となる。
- [19] 瀧雪亭の由来について、「直能は千宗室の門弟にて茶人なりしゆえに邸内に築山、泉水などの露地、茶室を千宗室の指図にて造らせ瀧雪亭と名付けたり」(『金沢古蹟志』)と明言するものもある。
- [20] 引違いの欄口は異例であるが、金沢では成巽閣清香軒をはじめとして実例が多い。
- [21] 『茶室大観Ⅱ』中村昌生著。昭和52年12月。創元社。

(平成6年12月17日受理)